

『死神は最後に天国に行く (大人 Ver.)』七種夏生

息子	男	登場
子		場
((人
3	4	物
0	5	
))	

男	ホ
の	ー
息	ム
子	レ
	ス

『死神は最後に天国に行く（大人 Ver.）』七種夏生

あらすじ

ホームレスとして公園で暮らしている主人公は過去に付き合っていた女性の妊娠報告に気が動転し、彼女を傷つけ別れを告げたことを後悔していた。

そんな主人公の元へある夜、三十歳くらいの男が現れる。男の過去を知っている男の正体は幽霊、学生時代に別れた彼女との間にできた、主人公の息子だった。息子の話によると彼女の母親、つまり主人公の元恋人は今病院にいるという。

「今晚天国に行くから会いに行け」と息子の言葉に従い、病院へと足を運ぶ主人公だが途中で事故に遭い、元恋人が看護師として働く病院へ搬送される。天国へ行くのは元恋人ではなく、主人公の方だったのだ。

息子の想いや元恋人の変わらない愛に胸を打たれ、心を入れ替えた主人公。来世では絶対に息子と元恋人を幸せにすると誓い、天国へ向かうのだった。

ベンチの端と端に男と息子が座っている。男はボサボサの髪に服装もボロ切れを纏ったような貧相な格好。

息子はスーツなどの上品な格好。

男が息子をチラチラ見つめていたが、しばらくして声をかける。

男 「あー、この公園治安悪いんで、考えごとしたいなら場所変えた方がいいですよ？ 夜中の二時ですし」

息子 「じゃあ、あんたはなんでこんなところにいるんだ？」

男 「俺はここが家だから……って、タメ語かよ。お前、歳いくつ？」

息子 「……（少し考えて）、三十」

男 「十五歳も年下だったのか、見えねえ」

『死神は最後に天国に行く (大人 Ver.) 』七種夏生

息子 「あんたこそ家に帰れば？今は丑三つ時
って言ってる、お化けが出る時間だからさ」

男 「俺に家なんてねーよ。この公園を拠点
としてる、いわゆるホームレスだ」

息子 「知ってる。見てくれからしてそんな感
じだし」

男 「わかってて近づいたのか…：なにが目的
だ？あんたみたいな立派そうなやつが
…：もしかして、俺みたいな社会の底辺
を笑いに来たのか？」

息子 「そんなことして何のメリットがあるん
だよ。社会の底辺か…：あんたがそうな
ら、俺はどん底だな」

男 「どん底？」

息子 「あんたより下にいるってことだ。性格
はあんたの方が悪そうだけどな」

男 「性格が悪いってのは間違っていないな。根
っからの悪だ、俺は。そのせいでこんな
人生送ってる」

息子 「仕事が合わないのを会社のせいにして
辞めて、職がないのを不景気のせいにし
て、自分が不幸なのを恋人のせいにして、
全てを捨てたって感じ」

男 「…鋭いな」

息子 「見てたからな、ずっと」

男 「みてた？」

息子 「もし人生をやり直せるなら、いつに戻
りたい？ 財産が底をついて公園に住み
着いた四十の夏、借金取りから逃げ出し
た三十五の秋、親と縁を切った二十五の
冬、子どもなんか知らない墮ろせと彼女
の腹を蹴って逃げ出した、十五の春」

男 「十五の春って……まで、お前、どうしてそんなこと……」

息子 「ちようど三十年前だな。あんたが俺の母さんを捨ててから、今日でちようど三十年」

男 「母さん？ まさかお前、あいつの……」

息子 「あんたが学生時代に付き合ってた彼女。覚えてるよな？」

男 「忘れるわけない……子ども出来たとか言われてカッとなって。その喧嘩の後すぐにあいつ転校して、それっきりになったけど」

息子 「喧嘩ってレベルじゃなかっただろ、あれ」

男 「でもその時の、三十年も前の子どもって……俺に復讐でもしにきたのか？」

息子 「さっきも言ったけど、丑三つ時ってのはお化けが出るんだ。さて、今何時でしょう？」

男、時計を確認して項垂れる。

男 「午前二時十五分……」

息子 「幽霊でもこの世に留まったら老けていくみたいでさ。だから俺、人間としての年齢は0歳なのに見た目はこんななんだ」

男 「人間としての年齢は0歳？」

息子 「母親の腹の中で死んだんだよ。生まれ落ちることすら出来なかった」

男 「俺のせいで……ははっ、この公園には長く居付いてるが、幽霊を見たのは初めてだ」

息子 「自分の息子を幽霊呼ばわりとはひど

いな。というか、やけに素直だな。本気で俺が幽霊だと思ってるの？」

男 「お前がここに来た時、足音が聞こえな

かったんだ。膝から下が無いようにも見えたけどまさかと思って……今は普通に足あるし」

息子 「他の人にはぼやっとしか見えていない。

足までくつきり見えてるのは、あんたが俺の父親だから」

男 「……どうして俺の前に現れた？ 今さら、三十年も経って」

息子 「市立病院にいる」

男 「市立病院？」

息子 「俺の母さん、つまりあんたの元彼女がそこにいる。今日、あの世へ行くんだ」

男 「あの世って、まさか死ぬのか？ あい

つが？」

息子 「母さんはあんたに会いたがってる」

男 「嘘だ。だって俺、あいつに……」

息子 「あんたのこと本気で好きだったんだよ、
母さんは」

男 「こんなろくでもない男なのに」

息子 「惚れちまったもんは仕方ないだろ。俺
には理解できないけど、人間として過ご
したことはないから」

男 「……悲しいこと言うなよ」

息子 「同情するなら母さんに会いに行け。最
期くらい、かっこいいところ見せろよ」

男 「そうか……そうだな……死んだらもう
二度と、会えないもんな」

立ち上がり自分の服装を気にする男。

息子、座ったまま目線は男に向ける。

息子 「服は気にしなくていいよ」

男 「でも、病院に入るなら……」

息子 「服装はどうでもいいよ。それより顔だ。

髭剃って、昔の面影がでるようにしとけ」

男 「髭かぁ、確かな」

息子 「あと、髪も切ったほうがいい」

男 「あの頃と同じ髪型にしよう……俺、そ

の頃どんな髪型してた？」

息子 「坊主でいいんじゃないね？」

男 「野球部だったっけ、俺？」

息子 「知らねーよ。だから、顔さえ見えりや

髪はどうでもいいんだって」

男 「あいつ、俺のことわかるかな？」

息子 「顔さえ綺麗にしとけば大丈夫だ。あと風呂つーか身体洗っとけ。臭いとみんなイヤだろうから」

男 「わかった。そうだな、俺は今日生まれ変わる。髭そって髪切って、あと飯食ってちよつと太ろう」

息子 「一日で太れるかよ」

男 「風呂入って綺麗になって、あいつの最期を看取るんだ」

息子 「がんばれ」

男 「おまえ、明日もここにいるのか？」

息子 「…なんで？」

男 「聞いてほしいんだ。俺とおまえの母さんの再会を、あいつの最期を」

息子 「あんたさ、時計持ってんの？」

男 「時計？ 持ってるわけないだろ。でも時間なら、公園にある時計でわかる」

息子 「いま何時？」

男 「午前二時半前だ」

息子 「丑三つ時もあと少しでも終わりだな。

俺はずっとここにいるよ。普通の人間には、午前二時から二時半までの間しか見えないけど」

男 「そうか。幽霊だもんな、おまえは」

息子 「待っててやるから。がんばって行って来い」

男 「ああ、また明日。同じ時間に」

暗転

徐々に明るく。

男、物陰に隠れてかつらと髭を取る。
服装は変わらず舞台中央へ。

男 「そろそろ二時か……あいつとの約束、
丑三つ時まであと十二時間だ」

男、自分の服装を見つめる。

男 「服はこれでいいって言ってたよな。よ
し、行くか」

一歩足を踏み出したところで、振り返
ってベンチを見つめる。

男 「行ってくるからな……行ってきます」

男にスポット。

男 「くだらない毎日が姿を変えた。花見客
の残飯で潤う春、茹だるような夏、獣の

家族を幸せにしたい。…：謝りに行こう、素直に懺悔しよう、過去の自分を。そして十二時間後、丑三つ時にあのベンチに戻って、『ただいま』って言うんだ。行こう、過去の後悔を乗り越えに。サヨナラを告げに、俺を好きになってくれた彼女の元へ。やり直そう、もう一度、あの日から

スキップするように歩みだす男。

鈍い衝突音とともに暗転。

救急車のサイレンの音、赤い光。

声 「市立病院前、自動車と衝突した男性を搬送します」

男の声 「俺は今日、生まれ変わるんだ」

息子が座っているベンチの端に、男が腰掛ける。

息子 「いま何時？」

男 「時計見りゃわかんだろ。午後十一時半だよ」

息子 「俺、幽霊なんだけど？」

男 「知ってる」

息子 「普通の人間は、午前零時から二時半までの間しか、幽霊を見ることができないんだ」

男 「昨日聞いた。だから俺は、また明日つておまえに言ったんだ」

息子 「まだ日付変わってないな。あんたはなんで、この時間に俺と会話できてんの？」

男 「わかってんだろ。幽霊だよ、今の俺は。

さつき身体が死んで、魂が抜けた」

息子 「交通事故だったらしいな。居眠り運転の車に吹き飛ばされたって」

男 「おかしいとは思ったんだ。おまえは市立病院って情報しか教えてくれなかったし、そもそも三十年も前に別れた元恋人が、今にも死にそんな人間の病室に通してもらえるのか、とか：：死ぬのはあいっじゃなくて、俺だったんだな」

息子 「ヒントはあげてただろ。服はどうでもいいから顔は綺麗にしとけとか、臭いとみんなイヤだろうから身体洗えとか」

男 「血だらけの服なんかすぐに剥ぎ取られるしな。がんばって身体洗ったけど、それでも救急車の中ではにおっただろうな。ああ、そうか、顔を綺麗にして：：おまえの母さんが、俺に気づくように」

息子「昔の面影がでるように。で、母さんには会えた？」

男「元気に看護師やってたよ、市立病院でな。運ばれてきた俺を見て泣いてた……あいつ、俺に気づいたな。こんなに歳とったのに、気づいて泣いてくれた」

息子「だから言っただろ、母さんはあんたが好きだって。ていうか、お互い様だろ」

男「お互い様？」

息子「あんだだって母さんのことわかった。三十年も前に別れた女なのに」

男「……今だから言えるけど、ずっと心残りだったんだ。喧嘩したあとすぐ転校して、連絡がとれなくなったしな」

息子「母さん、あんたのことが忘れられなくて苦しんだ。結婚どころか誰とも付き合おうとしなくて」

男 「今日で、俺と完全に別れたことで前に進めるかな、あいつ」

息子 「そうなる事が俺の願い。子どもはもう、無理かもしれないけど」

男 「じゃあ、あいつの子どもはこの世で一人、お前だけだなあ。あ、俺の子どももお前一人か」

息子 「……」

男 「偉いな、お前は。家族の幸せを思っている行動して……俺はなにもできなかったなあ、あいつにも、おまえにも」

息子 「今さらだな。あんたは今日、あの世へ行く」

男 「後悔しても遅い、か。おまえが産まれてれば、俺の人生も変わってただろうな」

息子 「あんた、すぐ成仏できるって言われた
だろ？」

男 「ああ、縛り付ける理由がないから、す
ぐにあの世へ行く手続きします、だって
さ」

息子 「最後だから一つ、あの時のこと教えて
やる」

男 「あの時？」

息子 「母さんが転校した、あんたの前から姿
を消した理由：俺を産もうとしてくれ
たんだ」

男 「：：え？」

息子 「十五で出産なんて世間的にやばい、そ
のまま学校なんて通えないだろ？ だか
ら転校して、誰も知らない場所で俺を産
もうとした。両親にも誰にも、あんたの
ことは言わずに」

男 「俺のことを誰にも言わなかった？」

息子 「彼氏とは随分前に別れてた、あの人は関係ない。余計なこと言って巻き込んで、迷惑かけないでっ」

男 「俺、あるとき、あいつに……」

息子 「俺に迷惑かけるな、関係ない知らないってわめいてたな」

男 「だから、俺から離れて一人で……」

息子 「馬鹿だよな。両親、俺にとったら祖母だ、母だな、あの人たちにも説教されてたよ、苦労するのは目に見えてる、今のうちに堕ろせて……なのに大丈夫ががんばるか、この子は私の子供だからって腹抱えて守ってくれて……毎日話しかけて優しくしてくれた。だから俺は、自分で自分を殺した」

男 「殺したって……産まれてもない、腹の中
にいただけだろ？」

息子 「悲惨だよな、そんな時期に自分でその
道を選ぶとは。しかも命には変りない
からって、すぐに成仏出来なかった。両親
の死を見届けないといけないんだと」

男 「……じゃあ、おまえは俺達より後に生
まれ変わるんだな」

息子 「輪廻転生の輪に入れるのは、あんた達
が生まれ変わった後だ」

男 「じゃあ、おまえ、また俺のここ来いよ」

息子 「は？」

男 「次の人生は絶対におまえの母さんを幸
せにする。今度はちゃんと守るから。だ
からまた、俺たちのところへ来い」

息子 「……なに言ってんだ」

男 「キャチボールしよう、公園で。弁当持

って、家族三人で。春も夏も秋も、雪が
降る真冬でも構わない。公園に行って遊
ぼう」

息子 「雪が降ってたらやだよ。夏だって暑そ
うだし。それより母さんのところには行
かなくていいのか？ もうすぐ今日が終
わる、あの世へ行くんだろ？」

男 「ああ、そうだな」

息子 「……サッカーがやりたい」

男 「サッカー？」

息子 「あんた、サッカー部だったんだろ？
腹の中にいたとき、母さんが言ってた。
ボールをキャッチする姿がとてもかっこ
よかったって」

男 「……ああ！ そういえばキーパーだっ
たな、俺！」

息子 「キーパー？」

男 「あー、えーとな：：口で説明すんの面倒くせえ！生まれ変わってからちゃん
と教えてやる、サッカーのルール」

息子 「わかった、楽しみにしとく」

男 「：：サッカー部は坊主じゃなくてもいいんだぞ？」

息子 「なんの話だよ？いいから、さっさと母さんのところ行けよ」

男 「そうだな。じゃあまた、次の人生で会おう。：：おまえ、名前は？」

息子 「あるわけないだろ、産まれてもないの
に」

男 「そうか、じゃあ考えといてくれ」

息子 「は？」

男 「母さんの死を見届けないといけない

だろ？ それまでしばらく暇だろうから。

考えとけよ、次に生まれ変わる時、どんな名前がいいか」

息子 「どんな名前って……」

男 「じゃあな、息子よ！ あっ、娘になっ

てもいいぞ。そしたら母さんにバレ

教えてもらえ！」

男、ベンチから立ち上がって歩き出す。

息子 「バレって……もしかして母さん、バ

レ一部だったのか？ ……俺が考えてど

うするんだよ、自分の名前」

勢いで立ち上がった息子だが、再びベ

ンチに腰掛ける。

息子 「生まれ変わったら、また……今度は本

当の、家族になれるかな。名前……どう

しようかな。母さんが死ぬまでまだ時間あるし、ゆっくり考えよう」

暗転

4

照明、中央だけ明るく。

ちゃぶ台の前に座っている男がいる。

息子、光の中に入って男に話しかける。

男 「おお、思ったより早かったなら、どうだった？」

息子 「幸せそうに逝ったよ。職場の人や友達に囲まれて、眠るように安らかに」

男 「そうか。結局独身を貫いたんだな、あいつ」

息子 「つーかあんた、まだこんなところに居たのかよ？ 生まれ変わらなくていいのか？」

男 「あいつを待ってたんだよ、おまえの母さんをな。歳の差結婚が流行ってるっていつても、やっぱりあいつとは同級生として出会いたいからな」

息子 「それは建前で？」

男 「本音は天国が居心地いいから……って、そんなわけないだろ！ 見損なうな！」

息子 「どうだか」

男 「でもまあ、それも今日で終わりだな。あ、約束覚えてるよな？」

息子 「生まれ変わったらまた、あんた達夫婦の子どもになるってやつだろ？」

男 「わかってるならいい。先に行って待って
てるからな」

息子 「ああ、わかった。いってらっしゃい、
父さん」

男、振り返って息子と見つめ合う。

息子 「なんだよ？」

男 「あ、いや……いい響きだなと思って……
……ああ、いってきます」

男、満足そうな顔をして歩き出す。途
中で何かに気がついて振り返る。

同時に息子も何かに気がついたように
一歩、男に足を踏み出す。

男・息子 「あのさ、名前……」

間。

男 「じゃあな。頃合いを見ておまえも生まれ変われよ」

息子 「わかった。じゃあ……」

男、退場。

息子、はっとして反対の方向へ体を向ける。

息子 「あ、はじめまして。俺、あなたとあいつの息子で……あっ、あいつって言うのは、母さんの元彼で……そう、あの時の。俺の父さんなんだ、あの人。それよりも、聞いて欲しい話があるんだ。あのさ、もし生まれ変わったら……」

— 終 —